

弦

愛知県

文学力を磨き高める共通の拠りどころ

同人雑誌『弦』は一九六五年の創刊。当時の名古屋市には、戦後復活の芥川賞を最初に受賞した小谷剛が主宰する『作家』をはじめ多くの雑誌があった。その『作家』の有力な同人、曾田文子が指導した文学グループの『新樹』と『草』が合併し『弦』を創った。曾田は一九八三年、病魔に倒れ、小谷も一九九一年に没しているが、同人雑誌を担う人から人へと、その文学は受け継がれている。

『弦』は創刊後もいくつかの同人誌と合併しながら、年に2回発行のペースを守ってきた。文学青年から始まり、何人もがバトンを引き継いできたが、現在の同人もまた、未だ壮年の気概を持って書き続けている。小説を書く同人が主体だが、本好きな人も、詩や評論、短歌、俳句をする人も加わり毎月行う例会では、いつも豊富な話題が飛び交い、笑いがたえない楽しい会である。

『弦』発行の翌月と翌々月の第三日曜日を合評会とし、その他の月は第三水曜日を読書会に充て、おもに純文学系の話題作を取り上げている。芥川賞、直木賞、その他の日本

国内の文学賞や、翻訳された海外の文学賞受賞作も視野に入れている。最近取り上げた作品を挙げると、カズオ・イシグロ「浮世の画家」、ミラン・クンデラ「存在の耐えられない軽さ」、シャーウッド・アンダーソン「ワインズバーク、オハイオ」、堀江敏幸「その姿の消し方」、小山田浩子「庭」、今村夏子「こちらあみ子」、橋本治「草薙の剣」などがある。

文学を志すには、いろんな書物を読むことは不可欠である。読書会では、自分とは違う読み方があることを教えられる。各々の固執した考えを浄化し新たな活力を生む。海外の小説からは、異文化に触れカルチャーショックを受けたり、考え方の違いを教えられたりもする。同人雑誌は合評会で、自分らの作品の善し悪しを指摘し合うだけで済ませてしまうのはいかにも勿体ないと思う。

『弦』の同人は現在一五名、会員は一八名。同人は原稿提出ができる。同人会費は年間二四〇〇〇円、会員は年三〇〇〇円。会員の原稿提出には別に規定がある。掲載負担金は、同人はページ四〇〇円、会員一〇〇〇円。追加の本代は一冊四〇〇円。

印刷部数は永らく五〇〇部だったが、最近の送料費値上がりの関係で贈呈分を五〇部減らし前号より四五〇部になった。

役員は代表（事務局）、編集、書記、会計、監査、各正副。



「弦」105号最終校正での編集委員、左より中村、國方、長沼、山田、市川、白井

編集委員は正副含め八名で、執筆者への校正送付と最終校正まで手分けして行っている。例会の会場は、おもに名古屋芸術創造センターを使用している。会場係が三カ月前の月初めに抽選会場へ出向き確保する。同人雑誌の維持は同人たちのさまざまな協力があって成り立っているのだ。

弦の会では、二〇一三年にホームページを立ち上げた。二〇一五年五月発行の『弦97号』から、全作品をネット上でも読めるようにした。現在では『弦104号』までアップされている。「同人誌弦」「文芸同人誌弦」で検索すれば誰でも読むことができる。読後の感想や批評などを掲示板に書き込んで頂ければありがたい。同人雑誌という狭い範囲内



ではなく、開かれた中で少しでも多くの人たちに読まれ、評価されることを書き手は期待している。そして書き手は社会的にも通用するものを書きたいと願っている。

小説は虚構の創作物にすぎないけれど、真実を超える力もあるのだと信じている。力不足の原因が文章力であれば、とことん文章を磨き上げたい。テーマが不明瞭ならば、構成から考え直せばいい。人間を描く力が足りないのなら、人の生きざま、心理の表裏まで掘り下げて考えたい。俗にまみれない素直な自分のことばで表現することを心掛けたい。とにかく書かないではおられない心情を持ち続ける場が同人雑誌にはある。

同人雑誌はもはや個々に存在するときではないとも言えよう。お互いに交流を深め文学力を高めて、「文学」という輝かしい目標を共通の拠りどころとする場にこそすべきであろう。幸いにも一九八六年に結成された中部ペンクラブは同人誌に橋を架け合い、交流する役割を果たしている。「弦」もその一員だが、この動きがさらに広がることを願う。

(文責／中村賢三)

弦の会 〒463・0013

名古屋市守山区小幡中三・四・二十七 弦の会

電話 052・794・3430



弦合評会 いつも他の同人誌からの参加もあり、和やかに厳しく